

集合住宅地の建て替え事業における緑環境のミティゲーションモデルの構築

代表研究者 宮城俊作（奈良女子大学生生活環境学部住環境学専攻 教授）

共同研究者 篠沢健太（大阪芸術大学芸術学部環境デザイン学科 助教授）

〔研究報告要旨〕

1950年代後半から60年代にかけて大量供給された我が国大都市圏の集合住宅では、ほぼ例外なく豊かな緑の環境ストックが形成されている。しかし、多くの建替え事業では、これら緑のストックを保全しつつ有効に活用し、より豊かな環境を構築していくための戦略的な計画論に関する意識が希薄であるものと考えられる。そこで、この研究では集合住宅の建て替え事業のプロセスにおいて、緑の環境ストックの保全と再生、さらにはそれらを活用していくための計画論的な諸条件を明らかにし、具体的なモデルを構築することを試みた。

特にこの研究をすすめるうえでは、保全生態学や景観生態学的の理論を援用したいわゆるミティゲーション（土地開発における自然環境の保全・再生のための措置）の手法が有効に活用されうるものと仮定した。建て替え事業における緑の環境ストックを、ミティゲーション事業の対象として位置づけ、建て替え事業にともなう影響を、回避、軽減、代償するための空間計画とその方法を明らかにしようというものである。

具体的には、近畿圏において1950年代後半から60年代に建設された日本住宅公団（現・都市基盤整備公団）のうち、建て替え事業が計画されている集合住宅地4カ所をケーススタディの対象として、以下に示すプロセスに沿って調査分析ならびに具体的なモデルの提案を行った。

- ① 集合住宅地における緑の環境ストックの調査と形成プロセスの分析
- ② 緑の立地環境の評価
- ③ 影響の回避ならびに軽減のための建て替えモデルの提案

その結果、調査対象とした集合住宅地では、緑の環境ストックの形成過程にある種のパターンが想定され、そのパターンを保全するかたちでの建て替え計画の可能性が示唆された。特に住棟配置と道路計画を、造成地形のメリットを活かしたかたちで再検討することにより、緑の環境ストックを最大限に保全しつつ、それらに新たな意味を付与するための計画モデルが提示された。